

世界遺産地区ペナン・ジョージタウンにおける  
 「大衆観光地化」批判  
 ——COVID-19 を契機として脱観光的／節度ある観光地へと  
 仕切り直すべきだ！——

Criticism of Mass Tourismfication at the World Heritage Site of  
 George Town, Penang, Malaysia:  
 A Call to Reinvent the Site to Be Less “Touristy” Using Covid-19 as a  
 Turning Point

藤巻 正己\*

要 旨

ペナン島（マレーシア）の中心市であるジョージタウンは、18世紀末以降、イギリスの植民地都市・自由貿易港として建設され、イギリス人などヨーロッパ人のみならず、華人系、インド系、マレー系などアジア系移民の流入により、東洋と西洋の文化が会う、多様な民族文化が融合する特徴ある街路景観（streetscape）を生み出した。老朽化が進み、数多くの空き家が目立ち始めた1980年代半ばから、旧市街地のショップハウス（shop-house）の保全と修景をめざしたNGO（Penang Heritage Trust: PHT）の取組みの結果、その歴史的景観を存続させるに至っている。その独特の街並みは、マラッカとともに「マラッカとジョージタウン、マラッカ海峡の歴史的都市群」（Melaka and George Town, Historic Cities of the Straits of Malacca）として2008年にユネスコ世界文化遺産に登録された。

---

\* 立命館大学文学部・名誉教授

この世界遺産登録を契機として、ジョージタウンは国際的な観光目的地となり、老朽化したショップハウスはゲストハウス、ブティックホテル、カフェやレストランなどに転用されるなど、ジョージタウンの街並みは急速に変容した。また、ペナン政府による「芸術の島 ペナン」プロジェクトによって、ショップハウスの壁面を活用したウォールアート (wall arts) やワイヤアート (wire arts) が新たな観光アトラクションとなり、クルーズ船やLCCの利用客など、地元の人口を上回る大量の観光客が押し寄せるようになった。その結果、多民族が共生し、歴史的建造物や古い街並みを残す世界遺産地区は、短期間のうちに大衆観光地化した。さらに、これまで外部者が入ることのなかった19世紀以来の華人の棧橋集落も「テーマパーク」のような「観光村」へと急変するようになった。

こうした急激な大衆観光地化は、世界遺産地区に観光公害をもたらし、オーバーツーリズムをめぐる問題がとりざたされるようになった2020年初頭、新型コロナウイルス COVID-19の感染拡大 (パンデミック) がジョージタウンの過度な大衆観光地化に冷水を浴びせることとなった。観光客数は急減し、インバウンド需要の蒸発によって観光ビジネスは一気に衰退した。いかにすれば、ジョージタウンは大衆観光地化する以前の状態にもどった。

本稿の目的は、ジョージタウンの観光地化の軌跡をふりかえりながら、“with/ after COVID-19”におけるジョージタウンの観光のあり方について検討を加えることにある。

### Abstract

George Town—the central city of Penang Island, Malaysia—was constructed as a British colony city and a free trade port after the end of the 18th century. The influx of not only Europeans such as Britons but also Asians such as Malays, the Chinese, and Indians has created a streetscape characterized by a blend of various ethnic cultures, where the East meets the West. Aging and

vacant storefronts in the old urban district need maintenance and repair so as to not stand out in stark contrast to newer surrounding buildings being erected. An NGO initiative, Penang Heritage Trust (PHT), was established in the 1980s. This initiative has been successful in preserving the historical landscape. George Town's distinct streetscape was registered as a UNESCO World Cultural Heritage in 2008, together with Malacca, as "Melaka and George Town, Historic Cities of the Straits of Malacca."

Since its World Heritage registration, George Town has become an international tourist destination, where the aging shops have been converted into guesthouses, boutique hotels, cafés, and restaurants. Such conversions have changed the townscape of George Town rapidly. In addition, under the "Art Island Penang" project initiated by the Penang government, wall and wire arts created on the walls of shop-houses have become new tourist attractions. This resulted in an influx of tourists, including cruise ship and low-cost carrier travelers, whose number surpassed that of the local population. As a result, the World Heritage site, where many ethnic groups coexist and historic buildings and old streets remain, has become a popular tourist destination in a short period of time. The 19th century Chinese settlements on the jetties, which had previously been closed to outsiders, have undergone a sudden transformation into a "tourist village" akin to a "theme park".

In the beginning of 2020, such rapid transformation of the World Heritage area toward a popular tourist destination became an issue due to both the pollution caused by tourism and over-tourism. However, the spread of the novel coronavirus (COVID-19) pandemic brought a sudden halt to George Town's excessive development as a popular tourist destination, since no tourists were able to visit the area. As a result, the tourism business in George Town shrunk, almost overnight, due to the disappearance of inbound demand.

George Town has since returned to the status it had before the city became a popular tourist destination.

The purpose of this paper is to review the history of George Town's development into a tourist destination, and to examine how tourism should be practiced in the era of "with/after" COVID-19.

**キーワード**：世界遺産地区、ウォールアート、姓棧橋、オーバーツーリズム、COVID-19、節度ある観光地、ジョージタウン、ペナン、マレーシア

**Key words**：UNESCO World Heritage, wall arts, clan jetties, over-tourism, COVID-19, moderate tourism site, George Town, Penang, Malaysia

## I はじめに

本稿が関心を払うマレーシア・ペナン州の主都ジョージタウンは、1786年にイギリス東インド会社が土着のマレーイスラム国のケダから租借し、その後、英領直轄の植民地都市および自由貿易港として繁栄をみた。その過程で、大陸中国南部の福建・広東などからの華僑・華人や、英領インドなど周辺のアジア地域からの移民を受け入れ、多民族社会が生成されることとなった。こうした植民地期の建造物や街並み、そして多民族が共生しあう社会と融合しあう文化とを今に残していることから、ジョージタウンはマラッカとともに2008年7月、「マラッカ海峡の歴史的都市群」として、UNESCO世界遺産に登録された。マレーシア政府観光局は公式HP<sup>1)</sup>において、世界遺産地区ジョージタウンを以下のように紹介し、観光地としての魅力を伝えている。

2008年7月にマラッカとともにユネスコ世界文化遺産として登録されたジョージタ

ウンは、18世紀後半、当時のケダ州のスルタンとイギリス東インド会社との条約により、イギリスの植民地として譲渡されました。当時のイギリス東インド会社の総督・フランシス・ライトにより「プリンス・オブ・ウェールズ島」と名付けられ、フランシス・ライトの居住する地区をジョージタウンと名付けました。ジョージタウンは主にイギリス植民地時代の建物と、様々な文化が融合した独特の街並みを今なお残しています。

ジョージタウンの植民地経験 (coloniality) がどのように観光資源として活用されているかについては別稿で論じたことがあるが (藤巻 2014; 2016)、本稿では、2008年の世界遺産登録後、ジョージタウンがどのように観光地化していったのかについて、観光ガイドブック『地球の歩き方』や筆者が撮影した写真資料を参照しながら景観論的に考察してみたい。

ところで、筆者が継続的にこの街を訪れるようになったのは、2003年11月からである。以下は、2003年度の後学期中に在外研究のためマレーシアの首都クアラルンプルに滞在中、マレーシア科学大学 (Universiti Sains Malaysia: USM) の研究者たちとの交流のため、ジョージタウンを訪れた際に綴った日記の抜粋 (一部、加筆修正) である。

2003年11月17日 (月) 晴れ

18年ぶりにUSM訪問のためジョージタウンを再訪。宿泊先の Bay View ホテルの部屋からは、1985年に宿泊した1895年創業のコロニアル色漂う Eastern & Oriental ホテル、マラッカ海峡、対岸の半島地域がよく見える。ホテルの前の通り沿いには白亜のコロニアル様式の旧植民地政庁、エスプラネード、コーンウォリス砦、時計台が位置する。この街の歴史的核心部だ。中国系の人たちを乗せた観光バスが走り抜ける。夕暮れ時の海辺の街区ゆえ、風が心地よい。汗をあまりかかずに歩くことができる。

コーンウォリス砦をひとまわりして、ビクトリア女王を顕彰した時計台、フェリー乗り場、インド人街、昔の風情を今も残すチャイナタウンを歩く。ペナン名物のトライショーの運転手から「乗らないか」と声をかけられたが、街歩きを続ける。

通りのあちこちに福建・広東・客家系の華人が建立した廟や出身地名を冠した会館、ヒンドゥー寺院、そしてモスクが建ち並び、老朽化したショップハウスでは昔ながらの商売が営まれている。バックパッカー向けの安宿やビールバー、土産物屋も点在している。ときおり、ガイドマップを手にした白人観光客を見かける。ジョージタウンは、ノスタルジアを感じさせる雰囲気漂う街であると知られるようになってきているよ

うだ。過度とも言える観光リノベーションを進めているシンガポールとは好対照である。他方、これまで近代化とか開発に邁進してきた首都クアラルンプルも、世界的に広がりをみせつつある遺産ブームに遅れまいと歴史的建造物の修景保存に力をいれはじめているが、マレーシアにあってジョージタウンが遺産観光のさきがけとなる可能性がある。

筆者のジョージタウンとの初めての「出会い」は、1985年9月初旬、「アジア地理研究会」の若手研究者たちとタイからシンガポールに向かう研究旅行の途上に訪れ、2泊3日滞在した時である。その後、時を経て、2003年以来、2019年9月までに、滞在期間の長短を別とすれば22回訪問した。そのうち、2009年9月26日～2010年3月30日の約半年間は、在外研究の機会を得てUSMに訪問教員として籍を置きながら、ジョージタウンなどペナン各地を探訪することができた。

ところで筆者は、昨年末の時点では、<sup>フラヌール</sup>遊歩者の気分で見聞きしたフィールド経験をふまえ、世界遺産地区に登録されて以降、ジョージタウン旧市街地の街路景観 (streetscape) や観光景観 (tourismscape) がどのように変貌をとげてきたのか、私の心象風景を描きながら考察することを予定していた。とりわけ、近年のジョージタウンにおける急速な大衆観光地化、それにとまなう<オーバーツーリズム>に対して批判的に論じたいと考えていた。しかし、明るる年の2020年に入った直後、状況は一変し、新型コロナウイルス (COVID-19) の世界的な感染拡大 (パンデミック) によって、ペナンの観光産業も大打撃を受けることとなった。1986年以来、ジョージタウンの歴史的建造物や街並み、旧市街地に暮らす住民の生活文化の保全、継承に尽力してきた国際 NGO として世界的に知られている PHT (Penang Heritage Trust) <sup>2)</sup> のクレメント＝リアン (Clement Liang) 氏によれば、<オーバーツーリズム>がとりざたされるようになるほどに観光客でにぎわっていたジョージタウンは、2月の春節以降、閑散とした街となり、「インバウンド需要の蒸発」によってホテルやゲストハウス、飲食店、土産物店などの観光事業者は

開店休業もしくは廃業を迫られている、という<sup>3)</sup>。パトラーの観光地域のライフサイクル・モデル<sup>4)</sup>に照らし合わせれば、ジョージタウンは「第4段階成熟期」にあって、沸騰する大衆観光ブームが限界閥に到達し、「第5段階停滞期」に移行する前に「冷水」を浴びせられてしまった、とみなさざるを得ないのだろうか。

こうした現状をふまえ本稿では、ジョージタウン旧市街地の観光地化の過程を景観論的にふりかえりながら（スケープの変化を通観しつつ）、2019年末までのジョージタウンにおける沸騰する大衆観光地化のありようについて批判的検討を試みるものである。そのうえで、“with/ after” コロナ（COVID-19）の状況のもと、＜持続可能な観光＞をめざすのであれば、ジョージタウンの政府や観光ビジネス、PHTなどの市民団体、ローカルの人々など、観光の現場を構築してきたアクターがどのように現状を認識し、将来展望を描くべきかについて問うこととする。そして、結論を前触れするならば、本稿では、ジョージタウンは＜観光に消費されず＞、むしろ＜節度ある観光地を追求＞すべきことを説きたい。

## Ⅱ ペナン・ジョージタウンは観光ガイドブックでどのように紹介されてきたか？

### 1. ペナンの観光地化の過程

近年、ジョージタウンは＜観光公害＞あるいは＜オーバーツーリズム＞が取りざたされるほどに、国際的な大衆観光地と化すようになった。本題に入る前に本章では、そうした状況に至るまで、ジョージタウンがガイドブックでどのようにイメージづけられ表象されてきたのかについて概観してみたい。ガイドブックは観光の現場の「写し鏡」であるとともに、情報化社会のなかで端末機器を活用して観光情報がより簡便に入手できるようになる以前から、観光客を誘導する主要なメディアであったからにはかならな

い。分析の素材は、1997 / 98 版から最新の 2020 / 2021 年版までの筆者の手元にある『地球の歩き方 マレーシア・ブルネイ』（ダイヤモンド社）である。

『地球の歩き方』の読み解きに入る前に、ペナンの観光地化の過程について粗描しておきたい。ペナンは 1970 年代、ベトナム戦争の最中、タイのパタヤビーチと同様、米軍兵士の保養地として整備され、1980 年代半ば以降、一時期、日本からの直行便が就航していたように、バトゥ＝フェリンギなど北部海岸のリゾート地が国際的にも知られるようになった。ペナンにおいて大型ホテルがバトゥ＝フェリンギに集中しているのは、そうした理由からである。これに対して、旧市街地のジョージタウンは 2000 年まで、「家賃統制令」によって再開発がなされないまま、戦前期からの老朽化したショップハウス (shop-house) やタウンハウスが残存し、居住環境の悪化から逃れ郊外の新興住宅地に転出する住民が増加した。その結果、ますます空き家や未改修のままの陋屋が放置されたりするなど荒廃の一途をたどり、その地で生業を営む住民や、低家賃に依存する貧困層が滞留する状態が続いていた（藤巻 2016）。1985 年に筆者がこの街を訪れた頃も、古びたショップハウスが建ち並び、観音寺、カピタン＝クリン＝モスク、マハ＝マリアマン＝ヒンドゥー寺院の境界では、屋台や家族経営の食堂などを営む、生業と密着した生活を送る華人や、インド系、マレー人などさまざまな民族が暮しあい、トライショーがのんびり行き交う風景を目の当たりにしたものである。ツーリストらしき外来者は、せいぜいチュリア通り沿いのバックパッカー向けの安宿（旅社）でみかけるくらいであって、旧市街地が観光地であるとの印象は希薄であったと記憶している。

しかし、1990 年代末から 2000 年頃にかけて状況に変化の兆しがみられるようになった。マレーシア政府が「観光立国」政策に本腰を入れて取り組み始め、1997 年の「Malaysia, Truly Asia」キャンペーン以降、全国的に観光戦略が展開されるようになったことから、「老舗の島嶼リゾート」としてすで



に知られていたペナンの観光地化が旧市街地のジョージタウンでも進行するようになったのである。すなわち、先述のように同地区の再開発を抑制してきた「家賃統制令」が解除されたこと、そして世界遺産ブームが沸騰するなかで、マラッカとともにジョージタウンが2008年に世界遺産地区に登録され、英領植民地期の歴史的建造物や街並みに「観光のまなざし」が向けられるようになったからにはほかならない。そして、廃屋や空き家になっていたショップハウスが観光投資の対象となり、ゲストハウスやブティックホテル、カフェなど観光客向けの施設に改修されるなど、荒廃の一途をたどり「スラム」化しつつあったジョージタウン旧市街地の観光リノベーションが進められるようになった。すなわち、世界遺産ブームに乗じて、植民地経験（コロニアリティ）を表象する歴史的建造物と街並みが現存する「ノスタルジックな街」、東洋と西洋の文化が融合する、多民族が共生しあってきた社会という「物語」が強調されることによって、にわか「観光地」として脚光を浴びるようになったのである（藤巻 2016）。

## 2. 『地球の歩き方』で紹介されるペナン・ジョージタウン

こうした動きは、『地球の歩き方』において、どのように読み取ることができるだろうか、本稿に関連する諸点について抜粋したのが表1である。

同表から、ペナンは一貫して「東洋の真珠ペナン」、「見どころもたくさんの老舗リゾート」として紹介されてきていることは明らかである。ジョージタウンについては「歴史的な建物が多数異国情緒の街」として紹介され、コンウォリス要塞、ペナン博物館、セント＝ジョージ教会、マハ＝マリアマン＝ヒンドゥー寺院、カピタン＝クリン＝モスク、クー＝コンシ（龍山堂邸公司）、観音寺、アチェ＝モスクといった歴史的建造物が「見どころ」としてあげられてはいる。とはいえ、1997/98年版ではリゾートアイランドに所在する歴史的な街、バトウ＝フェリングに宿泊するツーリストの「日帰り観光地」として付随的に位置づけられていた感がある。

表1 『地球の歩き方』(ダイヤモンド社)におけるペナン・ジョージタウンの紹介のされかた

年版	ペナン	ジョージタウン	ジョージタウンの見どころ
1997/98	「東洋の真珠 ペナン州」ランカウイ島の後で掲出。「見どころもたくさんのお老舗リゾート」	「歴史的な建物が多い異国情緒の街」として紹介。	コーンウォリス要塞、ペナン博物館、セント・ジョージ教会、マハ・マリアマン寺院、カピタン・クリン・モスク、クー・コンシ(龍山堂邸公司)、観音寺、アチェ・モスク(計8カ所)。
1999/2000			
2004/05	マレー半島西海岸のビーチ・リゾートとしてランカウイ島より前の頁で最初に紹介。「見どころもたくさんのお老舗リゾート」		
2005/06 ～ 2007/08	「アイランドリゾート」として紹介。これまで以上にペナンの地誌・観光の見どころが紹介。	ジョージタウンの「歩き方」。ペナン通り・チュリア通り境界の地図付き。	旧サイド・モハメド・アタラス邸が追記(計9カ所)
2009/10	世界遺産に登録。マラッカとジョージタウンの特設ページもあり。マラッカは「マレーシアのすべてを語る古都」、ジョージタウンは「混沌と融合に輝く奇跡の町」として紹介。	ジョージタウンが多民族社会であることなど街の成り立ちの紹介、「1本のストリートに、さほど間隔も空けずにキリスト教会、中国寺院、モスク、ヒンドゥー寺院が建ち並ぶ。異なる民族がそれぞれの文化を守りつつ、ひとつの町を共有する姿。それはまさに奇跡のハーモニーを奏でている。」(p.25)	ジョン・ファツツイ・マンション、プラナカン・マンションが追加、アチェモスク削除(計10カ所)。市街地図に「歴史的建造物」が明示。これまで地図上で「水上家屋」として表記されていた姓棧橋が「同姓一族の伝統水上家屋」として明示され写真も挿入(「見どころ」としての紹介なし)。

<p>2011/12 2012/13</p>	<p>「ノスタルジックな雰囲気 のジョージタウン」 2008年ユネスコにより、 マラッカとともに世界遺 産に登録されたことが記 載。</p>	<p>「歩き方」に「世界遺産 に登録された歴史都市 ジョージタウン」の見 出しあり。「特集 マ レーシアで生まれたバ バ・ニュニャ文化」が マラッカとの関りで紹 介。</p>	<p>見どころ(計10カ所) に「見出し」が付く。 「旧サイド・モハメド・ アタラス邸」が「ペナ ン・イスラム博物館」 として表記変更。</p>
<p>2014/15</p>	<p>同上</p> <p>ペナン島の観光案内所 の一つに「ペナンの歴史と 遺産保存に関して」PHT が注記。市街地図に位置 表示。</p>	<p>「特集2 母なる大自 然と貴重な歴史都市へ マレーシア世界遺産紀 行」(29～31頁)で ジョージタウン紹介。 ショップハウスの壁画を 見物しながら、トライ ショーで周遊するツー リストの写真あり。</p>	<p>見どころに「同姓一族 の橋 村人は皆同じ 苗字」として、姓棧橋 (Jetty)が追加、「ペナ ン・イスラム博物館」 削除(計10カ所)。コ ラム「ホーカーセン ター」(屋台街：ガー ニードライブ)</p>
<p>2020/21</p>	<p>同上</p>	<p>同上</p>	<p>見どころに「コムタ・ レインボー・スカイ ウォーク」の追記あり (ペナン博物館削除、 計10カ所)。コラム 「世界遺産地区にはス トリートアートが いっぱい」</p>

(出所)『地球の歩き方』ダイヤモンド社。

(注) 上表に掲出した年版は、筆者の手にあるもののみ。

しかし、2005/06年版以降、ペナンの地誌・観光の見どころに関する記載量が増えるとともに、バトゥ＝フェリングなど北部海岸のリゾート地と同等もしくはそれ以上に、ジョージタウンの魅力を伝える内容構成に変わり、ジョージタウンの「歩き方」として中心部のペナン通り・チュリア通り境界の地図が挿入されるようになった。このことは、ジョージタウンそれ自体が、観光目的地として認知されるようになった証左と言えよう。

さらに、ジョージタウンが世界遺産に登録された2008年以降になると、バトウ＝フェリングなど北部海岸の「老舗リゾート」に関する紹介はなされているものの、遺産地区の魅力をよりいっそう強調する内容になってきている。例えば、2009/10年版以降では、多民族社会としての街の成り立ちの紹介にかかわって、「1本のストリートに、さほど間隔も空けずにキリスト教会、中国寺院、モスク、ヒンドゥー寺院が建ち並ぶ。異なる民族がそれぞれの文化を守りつつ、ひとつの町を共有する姿。それはまさに奇跡のハーモニーを奏でている。」(p.25)といった「物語」が記載されている。また、「見どころ」に海峡華人(プラナカン)の富豪の邸宅であったチョン＝ファツツイ＝マンション(通称、ブルーマンション)、プラナカン＝マンションが追加され、これらを含めて世界遺産に登録された施設が市街地図で「歴史的建造物」であることが明示されるようになった。

2011/12・20012/13年版では、ジョージタウンが「ノスタルジックな雰囲気」漂う街であることが強調され、10カ所の「見どころ」にそれぞれ見出しが付き、来訪者の街歩きを誘う工夫がほどこされている(例えば、「コーンウォリス要塞：ペナン発祥の地で歴史を体感」、「セント＝ジョージ教会：白亜の造りが美しい東南アジア最古の英国教会」、「カピタン＝クリン＝モスク：インドの伝統的様式を取り入れたペナン島最大のモスク」など)。また、これまで詳しく記載されてこなかった、明・清代に渡来してきた中国人男性とマレー人女性との間で生まれた子孫(海峡華人：プラナカン)である「ババ＝ニョニャ」による独特の文化も、マレーと中国の文化の融合を物語る「生きる遺産」(the living heritage)として紹介されるようになった。

2017/18年版において特筆すべきは、「マレーシアの世界遺産紀行」と題する特集が組まれたことであろう(29-31頁)。そのなかで「ペナン島の中心ジョージタウンの象徴ともいえるのが、ノスタルジックなショップハウスやコロニアル建築群だ。古いものを大切にしてきた結果、現代で新たな評価を得たジョージタウンはノスタルジックながらエネルギーな町として、現

在も生き続けている。」(下線部：筆者)との記載がなされ、ショップハウスの壁画を見物しながら、トライショーで周遊するツーリストの写真が挿入されている。とくに注目したいのは、下線部の記述である。すなわち、ジョージタウンが単なる(過去の歴史的建造物や街並みから成る)遺産地区ではなく、そこを舞台に〈ウォールアート〉という新たな創造的活動がなされ、ツーリストの〈話題〉を呼んでいることが紹介されている点である(この点については後述する)。また、「見どころ」に「同姓一族の橋 村人は皆同じ苗字」として姓棧橋かばね(clan jetty)が追加され、「中国人移民の水上部落。周一族の橋 (Jetty Chew)、陳一族の橋 (Jetty Sin)、林一族の橋 (Jetty Lee) などがある。今は観光名所になったが、人々の生活があり、民家の間に寺や小さな店があちこちに張り出し、軒先におじさんが寝ていたりする。町の散歩のなかでも最もユニークな場所の一つであろう。」(下線部：筆者)との解説がなされるようになった。これらの姓棧橋は、これまで地図上で単に「水上家屋」として表記されていたが、2009/10年版では市街地図に歴史的建造物「同姓一族の伝統水上家屋」として指示され、2017/18年版では「見どころ」に加えられることになった。

なお、最新の2020/21年版では、「見どころ」として改修工事のため閉館中のペナン博物館が削除され、代わって新たな観光アトラクション装置として、ペナンの「バベルの塔」と揶揄されてきた高層ビルKOMTAR<sup>5)</sup>の65階と屋上に約250mからの眺望可能な展望施設「コムタ＝レインボー＝スカイウォーク」(2016年竣工)が付け加えられた。また、ジョージタウンが〈アートの街〉として知れ渡るようになった観光の現場の状況を後追いつめるかのように、「世界遺産地区にはストリートアートがいっぱい」というコラムも設けられている(下線部：筆者)。

以上のように、2008年のUNESCO世界遺産に登録される前後で、ジョージタウンの『地球の歩き方』における紹介のされ方、〈観光のまなざし〉の向けられ方に変化をみてとることができよう。すなわち、ペナンが「南国の

島嶼リゾート地」である、という位置づけは変わらないとしても、ジョージタウンが世界遺産に登録されて以降、英領植民地期の経験（コロニアリティ）を街並みに残し、今もなお「多民族が共生する」「ノスタルジックな街、ジョージタウン」という語り方が強調されるようになった。そのうえで、ジョージタウンの観光目的地としての付加価値を高めるべく、〈ウォールアートの街〉というプロモーションが連邦・州政府観光局や観光ビジネスによって展開されてきた、と読み解くことができる。

それでは、こうした動きにともなって、ジョージタウンのツーリズムスケープはどのように変貌をとげてきたのであろうか。次章では、筆者が断続的に撮影してきた写真を素材に景観論的アプローチを試みてみることにする。なお、遺産地区の観光空間化にともなう社会地理的状況（人口・世帯数、住民の民族構成）やショップハウスの利用状況の変化、そして観光地化にともなうジェントリフィケーションをめぐる問題については、拙稿（藤巻2016）を参照されたい。

### Ⅲ ジョージタウンのツーリズムスケープの変貌

#### 1. 街路景観（streetscape）の変貌

##### 1-1 世界遺産登録前の街路景観

写真1は、2003年当時のマシジッド＝カピタン＝クリン（カピタン＝クリン＝モスク）通りの風景である。そう長くはないこの通りは、多民族が長年にわたって共生しあってきた街であることを〈物語〉るべく、〈ハーモニーストリート〉と呼ばれてきた。この界限には、福建・広東出身の財を成した海峡華人や1800年代以降新たに流入してきた華僑・華人（新客）が建立した観音寺、インド系ムスリム商人が寄進したカピタン＝クリン＝モスク、福建出身のヤップ（葉）一族の宗廟であるヤップ＝コンシ（公司）（写真2）、クー（邱）一族が建立した宗廟クー＝コンシ、胡椒交易で財を成したアラブ



写真1 ハーモニーストリート

写真中央の木立の後ろにマシジッド＝カピタン＝クリンが見える。この頃はまだ観光客の存在は希薄であった。(2003年11月17日、筆者撮影)



写真2 ヤップ＝コンシ前の長閑な風景

世界遺産に登録される1年前のマシジッド＝カピタン＝クリン通りとアルメニア通りの交差点に位置する客家系の壮麗な廟。この数年後、この界隈はマストゥーリストのホットスポットとなる。(2007年8月9日、筆者撮影)

商人が寄進したアチェ＝モスクも点在している。マハ＝マリアマン＝ヒンドゥー寺院付近にはリトル＝インディア、ペナンロード寄りの広東系のチャイナタウンなど、少し足を伸ばせば、それぞれの民族景観（エスノスケープ：ethnoscape）とそこに生きる住民の生活文化の只中に身を置くことができた。この頃はまだ、旧市街地で街歩きするツーリストの姿をみかけることがあっても＜過剰存在＞として映らず、地元民の日常的な暮らしが息づく街でツーリストが異国情緒を愉んでいるという情景が今なお追憶される。

## 1-2 大衆観光地化する遺産地区

2008年に世界遺産に登録されて以降、ジョージタウンの街路景観は一変した。遺産地区を訪れる観光客が急増するようになったのである。前章の『地球の歩き方』における記載内容の変化でも明らかなように、ジョージタウンは「イギリス・コロニアルな白亜の建築様式」や「東洋と西洋との出会い」に想いを馳せさせる「エキゾチックな街並みを今に残すイギリスの旧植民地都市」であることが強調され、旅行代理店のHPや旅行経験者のブログなどでも同様の惹句が飛び交う状況がうまれるようになった。また、『マラッカ ペナン 世界遺産の街を歩く——大航海時代へのノスタルジアに誘われて』（イワサキ・丹保 2009）や『マレーシア ペナン——古くて新しいエキゾチックタウンを歩く』（イカロス 2014）など、ジョージタウンの魅力を深掘りしたビジュアルな雑誌も刊行されるようになったこともあってか、遺産地区を街歩きする日本人観光客も増加するようになった。そして、外部資本や地元企業によって、空き家や老朽化したショップハウスが、観光客の目を惹くようなファザードに意匠を凝らしたブティックホテルやゲストハウス、カフェ、土産物店、ギャラリーなどに改修されるなど、ジョージタウンの観光地化が顕在化するようになった（写真3）。

## 1-3 ウォールアートの街、インスタ映えする大衆観光地と化した世界遺産地区

2012年以降、ジョージタウンの観光シーンはさらに変貌をとげた。歴史的建造物や街並み、多民族社会における人々の日常生活にふれ、〈非日常的経験〉を感受するという観光行動にとどまらず、老朽化したショップハウスの壁面を使った〈壁画〉と〈ワイヤアート〉（wire arts）を鑑賞しながら、「自撮り棒」を手にく街歩き〉を楽しむ新たな観光のかたちが評判を呼び、ジョージタウンの大衆観光地化が一気に進んだのである。

壁画の出現は、ペナン州政府の依頼により、2012年にリトアニア出身の若





写真3 カフェやバーに転用されたショップハウス  
(2009年10月18日、筆者撮影)

手アーティストであるアーネスト＝ザカレビッチ (Ernest Zacharevic) 氏が、「ジョージタウン＝フェスティバル 2012」の一環として制作した9作品を端緒とする（その後、マレーシア人の作者による猫をテーマにした6作品を含めて＜公式的壁画＞は15件となる）。なかでも“Kids on Bicycle”（アルメニア通り）（写真4）や“Boy on Motorbike”（アーキー通り）が人気を集めている。

他方、ワイヤアートは、クアラルンプルのデザイン会社であるスクラプチュア＝アット＝ワーク (Sculptreatwork) による鋼鉄を溶接した「3D 戯画」(写真5)であり、52作品が街角の各所に展示されることとなった。ワイヤアートも、ウォールアートと同様、ショップハウスの壁面を背景に、地元の日常生活のひとコマや裏通りの生きられた歴史をモチーフにしたコミカルな作品が多い。

このような遺産地区の＜街歩き＞と＜ストリートアート＞とを組み合わせたジョージタウンにおける新しい観光のかたちは、公式非公式を問わず、ガイドブックやWeb、SNSなど、さまざまなメディアを通して情報発信されてきた。マレーシア政府観光局は「ジョージタウンの世界遺産地区には、コミカル&情緒豊かなアートがいっぱい」と題して、ジョージタウンのストリートアートを鑑賞しながらの街歩きを次のように推奨している<sup>6)</sup>。



写真4 アルメニア通りの壁画“Kids on Bicycle”の前で写真を撮る家族  
(2014年8月22日、筆者撮影)



写真5 街角のワイヤーアート  
(2014年8月22日、筆者撮影)

ジョージタウンの世界遺産地区は、いまや「アート」の街。リトアニア人アーティストが手掛けた、ペナンの日常を描いたアートが街に9か所、ペナンの今昔のエピソードをコミカルに描いたアイアンアート52か所が街に点在しています。これに刺激を受けたアーティスト達が街のあちこちにアートを施していて、街にはアートを探しながら歩く人たちがいっぱい！世界遺産とアートを眺めながらの街歩きはいかがですか？

「世界遺産地区でストリートアートを愉しむ」という観光形態は、〈映える被写体〉が備わった（とともに〈自身をも映えさせる〉）場所へ誘う観光へと転位させた。例えば、あるマレーシア情報サイトでは「ペナン島はイン

スタ映えの宝庫！」<sup>7)</sup>と銘打っていることから明らかなように、ジョージタウンをして、もはや世界遺産地区としてではなく、〈ウォールアート〉あるいは〈フォトジェニックな街〉に惹かれる観光客が横溢する街へと変貌させることとなった。

とくにマシジッド＝カピタン＝クリン通りとアルメニア通りの交差点付近は大量の観光客でごったがえすホットスポットとなった（写真6～8）。クルーズ船が寄港すれば、千人単位の観光客が群れをなしてやってくる。〈



写真6 観光スポットでトライショーを愉しむ観光客

マシジッド＝カピタン＝クリン通りとアルメニア通りの交差点界隈が世界遺産地区の観光スポットとなっており、観光客でごったがえしている。（2019年2月24日、筆者撮影）



写真7 クルーズ船乗客一行でにぎわうヤップ＝コンシ界隈

マシジッド＝カピタン＝クリン通りとアルメニア通りの交差点付近の光景。写真2と比較してみれば、この界隈がいかに観光客のホットスポットになったかが一目瞭然である。（2019年2月24日、筆者撮影）

ウォールアートの聖地巡礼>を实践する観光者たちにとって、“Kids on Bicycle”や“Boy on Motorbike”など人気の高い<アイドル>の前でパフォーマンスをし、写真撮影をし、<アイドル>を意匠した土産物（写真9）を購入することが一連の観光行動において必須の要件となっているのだ。

ジョージタウンのガイドマップ（紙・デジタル媒体を問わず）は年々多種多様化し、ウォールアート、ローカルフードの店、「3D 逆さまミュージアム」（Upside Down Museum）などの「没場所的」アトラクションの所在地が満載



写真8 ツーリストでにぎわうアルメニア通り

最も人気が高い壁画「Kids on Bicycle」が近くにあり、さらにその先には新たな観光スポットとなった周栈橋が位置する。（2019年9月8日、筆者撮影）



写真9 アルメニア通りの土産物店

壁画“Kids on Bicycle”を題材にした土産物が多い。  
（2019年9月8日、筆者撮影）

されるようになった。世界遺産に登録された歴史的建造物は、単に「街歩きのための標識」としての役割を果たしているにすぎないかのようだ。

ウォールアート、とりわけ壁画の氾濫については、絵柄といい、そのサイズといい「過剰」であり、(世界遺産地区の、というよりも) ジョージタウン(そのもの)の街路景観を破壊している、とクレメント＝リアン氏は批判している(Clement Liang 2017)。他方、鍋倉(2018)は、作品の価値や意味とはかかわりなく、観光客は「アートツーリズム」を愉しんでいる。ただし、観光客が(芸術としての)「アート」をテーマにしたツーリズムに参加しているか否かは別の次元の問いである、という。いいかえれば、世界遺産地区ジョージタウンのウォールアートの巡礼者たち(観光客)の多くはそれらの作品性そのものよりも、〈話題〉の〈ウォールアート〉との出会い、確認、作品との情動的同一化(パフォーマンス)を愉しんでいる、ということであろうか。

〈オーバーツーリズム〉が懸念されつつあるなか、COVID-19禍に苛まれる直前まで、こうした状況は際限なく続き、LCCやクルージングで運ばれてきた観光客の急増によって、世界遺産地区およびそこで暮らしてきた住民にとって日常生活を脅かす「abnormalな大衆観光」が徹底して行われてきたのである。

## 2. マスツーリズム [禍] に曝され「テーマパーク」と化した姓棧橋

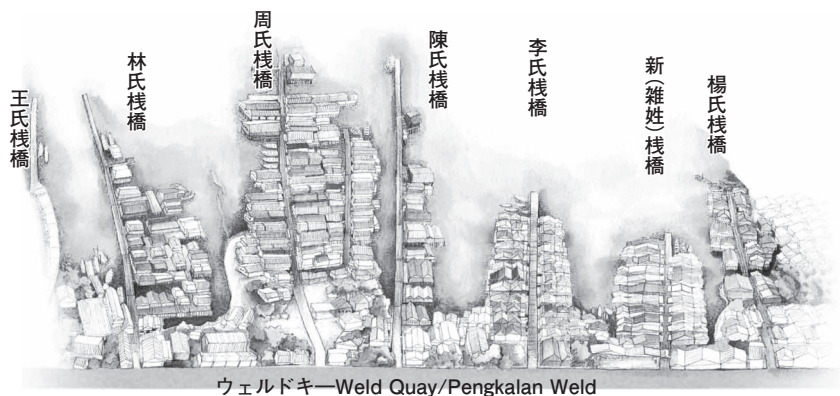
遺産地区において観光地化が最も急激に進んだ場所は、上述したマシジッド＝カピタン＝クリン通りとアルメニア通りとの交差点の界隈のほかに、現存する7つの「姓棧橋」(Clan Jetties)のうち周氏棧橋(Chew Jetty)であろう。この周氏一族の集落(75戸)は、孫文基地記念館(一時期、亡命生活をしていた孫文がベナンに潜伏していた建物)が所在するアルメニア通りからマシジッド＝カピタン＝クリン通りを越え、壁画「Kids on Bicycle」を経て、まっすぐその先に向かった海辺に位置する。入り口には「周姓橋」の看板が

立ち、観光客など外部者を歓迎する構えを示している。

ここでいう「姓棧橋」とは、前章でも少し触れたが、ジョージタウンが自由貿易港として成長を遂げる過程で、港湾での荷役、水や食料の供給など寄港する船舶を相手にしたさまざまな活動に関わってきた宗族 (clan) を同じくする福建系の水上集落である。かつては9つの姓棧橋があったが、現在、7つが現存する (図1)。

『ジョージタウンの姓棧橋』の由来については、2010年にペナン州政府が設立した「ジョージタウン世界遺産機構」(George Town World Heritage Inc) が制作したパンフレット (日本語版) の以下の説明が参考になろう。ちなみに、同資料の調査・文筆者はPHTのクレメント＝リアン氏である。

姓棧橋は同姓や中国の同郷の福建人が19世紀末に住み始めた場所でした。... <略> ... 棧橋北部の港では船舶が多く来航し、停泊できない船舶も多くありました。これを打開するため、積荷や船客を降ろし、積荷の取引もできる棧橋となったのが姓棧橋の始まりでした。これらの棧橋は、... <略> ... のちに特定の姓氏一族が占めるようになり、... <略> ... 簡単な小屋が棧橋ののちに建てられました。小屋はその後、共同住居に変わり、これ以降付近には住居が増えていきました。... <略> ...



ウエルドキーWeld Quay/Pengkalan Weld

図1 現存するジョージタウンの姓棧橋

(出所) 『ジョージタウンの姓棧橋』George Town World Heritage Inc. (ジョージタウン世界遺産機構)



王氏、林氏、周氏、李氏といった栈橋の住民たちは、... <略> ... 港内に停泊する船への乗客へのシャトルサービスや貨物サービスを提供しました。他方、陳氏や楊氏、郭氏の各一族は主に木炭や薪の取引に従事していました。

彼らの住居は英国植民地政府により法的に承認されていましたが、1957年にマラヤ連邦が独立すると栈橋付近の住居は短期占用許可が与えられただけでした。... <略> ... この姓栈橋は、汚いスラムとしてしか見なしていなかった当局により絶えず取り壊しの危機に遭ってきました。... <略> ...

海に突き出ている指のように、姓栈橋はジョージタウンの海岸線に沿って出ている、100年以上にわたって固い絆で結ばれたコミュニティーを形成しています。これらのコミュニティーはペナン港の栄枯盛衰を見てきました。ペナンの都市化は姓栈橋にも影響を与え、水上で生まれたそのユニークなコミュニティーにも大きな脅威となってきました。しかし、彼らはその伝統的な生活様式を懸命に守り続けてきたのです。... <略> ...

「姓栈橋」は、上述のように『地球の歩き方』においてジョージタウンの「見どころ」に加えられ「同姓一族の橋 村人は皆同じ苗字」として写真付きで紹介されるようになった。かつては、外部者の立ち入りがほとんどなかった排他的な空間であったと言われてきたが、2019年の2月と9月に筆者が訪れた際、狭隘な空間はツーリストで埋め尽くされ、ごったがえしているさまには驚嘆せざるを得なかったものである。

## 2-1 大衆観光地化する前の姓栈橋

筆者が初めて訪れた2003年11月当時、栈橋集落には観光者の姿はほとんどみられなかった（写真10・11）。

2003年11月18日（火）

USMのMiji君の案内で、Weld Quayのフェリー乗り場近くの林（Lim）氏と周（Chew）氏などの姓名を冠したJetty（栈橋集落）をいくつか回る。彼には、ペナンのスクォッター（不法占拠者）集落を案内してほしいとリクエストしていたのだが、これらの水上集落がかつてスクォッター集落だったという。近年、ペナン州政府が撤去の対象であった栈橋集落の存在を合法化したのだという。

集落の入り口には華人コミュニティーの証ともいえる廟が立つ。そこから海に向けて、潮の満ち引きがある海面に打ち込んだ杭の上に板張りをしたJetty（栈橋）が伸び、通



写真 10 観光地化する以前の周棧橋  
(2003年11月8日、筆者撮影)



写真 11 観光地化する以前の周棧橋  
(2003年11月8日、筆者撮影)

路の両脇に水上家屋が軒を連ねる。福建出身の林氏の棧橋住民によれば、この集落は100年以上の歴史があり、現在35軒、100人以上が暮している、という。陽がまだ高い日中のためか、郵便配達人が各家をまわっているほかは、ひと気はほとんどない。

隣の周氏 Jetty では2、3名の白人観光客をみかける。棧橋の先端でニュージーランドからヨットで周航中の夫婦に遭遇する。休息を兼ねて給水と食料調達のためにジョージタウンに寄港したという。集落の中には住居を兼ねた小さな雑貨店が2軒あり、日用品のほかに冷菓や土産物用の腕輪などが売られている。棧橋集落は外部者の来訪を嫌い、外部者は棧橋集落に立ち入ることさえはばかれる排外的閉鎖的な空間であったとのことだが(集落の外の通りでは屋台や食堂で生業を立てている住民がおり、外界との接点はあるのだが)、観光客の来訪を意識し、小さきながらも観光ビジネスに取り組み始めた住民がいるのだろう。店番の若い女性から飲料水とともに10枚組の絵葉書 *Penang*



*The Clan Jetties*<sup>8)</sup>を旅の土産に買い求める。(筆者「マレーシア日誌」抜粋、一部加筆修正)

## 2-2 世界遺産登録後、外国人観光者が訪れるようになった周棧橋

これまで外部に対して閉鎖的であり、ジョージタウンの他地区の住民すら近寄りたがった棧橋集落は、2008年世界遺産を構成する歴史的建造物として登録されて以降、観光客の訪問を受け入れるようになった(写真12)。周氏棧橋集落では「水上民宿」(写真13)や遊覧船の運行ビジネスも話題になった(藤巻 2016:329)。とはいえ、2010年に周氏棧橋を再訪した際も、わずかながら観光者とすれ違うことがあったものの、外部者は集落に受け入れてもらう存在でしかなく、大手を振ってズブズカとコミュニティに「侵入」する存在(invader)ではなかった。また、土産物店などの出店もわずかで、集落内は静かなたたずまいをみせていた。しかし、9年後の2019年に再訪してみると、周棧橋は一変しており一大観光地と化していた。『地球の歩き方』での紹介に先行して、Web上では姓棧橋はすでに<インスタ映え>する場所として紹介されており<sup>9)</sup>、観光者によるSNSの発信、拡散によって、瞬く間に国内外の観光客を呼び込むように変貌をとげていた。



写真12 観光客が訪れるようになった周棧橋

世界遺産登録後、<観光のまなざし>が向けられるようになった。写真奥に数名の観光客の姿が見える。(2010年3月1日、筆者撮影)



写真 13 世界遺産登録後周棧橋に民宿（左上）が登場  
(2010年3月1日、筆者撮影)

### 2-3 テーマパークと化した周棧橋

完全に大衆観光地化し、あたかも「テーマパーク」であるかのような場景を呈していたのは周棧橋である。李棧橋は入り口に「歓迎光臨」のイルミネーション付きのゲートや集落内に冷菓店が数店舗あり、観光者の姿が数組見られたが、ほかの棧橋集落と同様「観光棧橋」化していなかった。

さて、周棧橋についてである。上述したように『地球の歩き方』の2017/18年版では、「今は観光名所になったが、人々の生活があり、民家の間に寺や小さな店があちこちに張り出し、軒先におじさんが寝ていたりする。町の散歩のなかでも最もユニークな場所の一つであろう。」との記載があるが、2019年の再訪時には、そうした情景は掻き消されるほどに、土産物店などが建ち並ぶ狭い板張りの棧橋をツーリストがぞろぞろと行き交い（写真14）、棧橋の先端でツーリストが写真を撮りあっているさまは、筆者のフィールド経験からすれば、台北郊外の「九份」と見紛うほどであった（周棧橋の「九份化」Jiufenization!）。

板張りの通路（デッキ）が拡幅されたところには（写真15）、2010年に訪れた時にはなかった「周橋大碗公麵」（Chew Jetty Big Bowl Noodles：写真16）の看板をかかげた食堂が訪問者の人気を集めていた。周棧橋先端の廟の脇の乗降場では、所要時間15分のクルージングを楽しんだ観光客が下船し



写真 14 「九份」化した周棧橋

狭い板張りの通路は土産物店と観光客であふれかえっている。(2019年9月8日、筆者撮影)



写真 15 完全に大衆観光地化した周棧橋

板張りの通路は拡幅され、水上家屋(右上)に壁画が描かれており(写真11と比較)、写真撮影のスポットになっている。SNSで評判を呼んでいる「大碗公麵」を売り物にした食堂(写真左)も登場した。(2019年2月24日、筆者撮影)

てくる(写真17)。もはや、観光客は棧橋集落の由来やその歴史的意義に思いを馳せることなく、住民の日常生活に気遣うことなく、ただ単にSNSなどで<話題>になっている棧橋集落の雑踏の熱に浮かれ、自分がそこにいることの存在証明のために<インスタ映え>する写真を撮影し、情報を拡散することに愉悅を覚えているかのようである。

明らかに集落の住民の数をはるかに上回る、そして物理的に、棧橋集落は維持できるのであろうかと懸念を覚えるほどの数の観光客が、干潮時に



写真 16 周棧橋に出現した「周橋 大碗公麵」の店

拡張された板張りの通路に面した場所に出現した食堂は<話題>に惹かれた多くの観光客を呼び込む集客装置となっている。(2019年9月8日、筆者撮影)



写真 17 周棧橋突端のクルージング船乗降場

(2019年9月8日、筆者撮影)

はゴミの散乱をみせるシルト状の泥土に打ち込まれた杭の板張りの狭い棧橋を、手持ち扇風機やスマホを片手にドリアン風味のキャンデーを舐めながら歩き回っている。以前であれば、開け放たれていた家屋の入り口は、商売をしている家以外はみな閉ざされ、「写真を撮るな！」と張り紙をしている家も目にする。100年以上にわたって福建系移民が生活の場としてきた棧橋集落は、今や観光ビジネスの場になり果て、しかも<無秩序な観光空間>(disorganized tourism space)<sup>10)</sup>と化している。到底、ホスト/ゲスト間で「歓待」(ホスピタリティ)が「交歓」される情景を垣間見ることができない

状態になり果てている。

ジョージタウンの歴史を伝える〈生きられた／生きられる遺産〉であるとして、棧橋集落の撤去に反対し、その存続に向けて尽力してきたPHTのクレメント＝リアン氏によれば、周ジェッティ住民の6割が観光収入を得るため観光地化に積極的であり、残りの4割の人々は消極的もしくは反対である。つまり、住民の過半数は、「目先の観光収入を得る」ことに血眼になっている<sup>11)</sup>、というのである。しかし、一時的なく非日常的〉愉悦を感受するため、〈話題〉の〈インスタ映えする〉棧橋集落を観光客が襲来することによって、自分たちの〈日常的〉生活の場が脅かされているという現状を、住民はどのようにとらえているのだろうか。

『ジョージタウンの姓棧橋』のパンフレットの最終頁には、観光客向けに「姓棧橋でのマナーについて」(p.28)が、以下のように明記されている(下線部：筆者)。

棧橋では以下のマナーをよく守りましょう。

1. 喫煙は固く禁じられています。
2. ポイ捨てはしないでください。ゴミはすべてゴミ箱に捨てるか持ち帰りましょう。
3. 怒鳴ったり、叫んだり、大声を出さないでください。
4. 大人数で訪問しないでください。これは木造でできた棧橋に影響するためです。(下線部：筆者)
5. お手洗(筆者注：集落入り口付近の公衆トイレ)でのみ用を足してください。
6. 地元の習慣に気を付けてください。住民の中には保守な方(マナー)がおられ、日常生活を妨害しないでください。
7. 人物やイベント、宗教関連のものを写真撮影する際は許可を得てください。
8. 私有地には入らないでください。
9. 礼儀を重んじ、規則を順守してください。

どこまで観光客があらかじめこの「マナーについて」を熟知したうえで、周栈橋を訪れているかは不明である。実際、「4. 大人数で訪問しないでください。これは木造でできた栈橋に影響するためです。」との呼びかけは、現状とは乖離した空しい文言となっている。できるかぎり観光客を呼び込み、日銭を少しでも多く稼ごうとする観光事業者（商売つ気のある地元民や軒先の「場所代」を支払って商いをする人々）にとっては、2010年にペナン州政府が設立した George Town World Heritage Inc.（ジョージタウン世界遺産機構）によるツーリストへの注意喚起に対しては「おかまいなし」、といった状況であろうか。一時的にホットスポットとして<話題>になった場所が、大衆観光地として消費・蕩尽され尽くし、<話題>を失えば<観光スラム化>するのではないか、といった想像力を周栈橋で観光利益を追求してきた人々は持ち得ているのであろうか。

栈橋集落への物理的負担を少しでも軽減するためには、観光客の受入れ数を管理・抑制する必要がある。また、観光ビジネスに参加している住民が経済的利益を得、そうではない住民は日常生活が脅かされているという状況は、コミュニティの存続を考えれば、なんらかのかたちで埋め合わせる必要がある。そして、“With/After COVID-19”は、周ジェットを荒廃した<観光スラム>にさせてしまうのか、地元民と来訪者とが<ホスピタリティを交歓>できる normal なコミュニティへと回帰し存続させるべきなのかいなか、観光事業に参加している住民も冷静に考え直すべきであろう。栈橋集落の住民自身が、コミュニティの存続を図りつつ、<節度ある観光集落>を追求すべきであるならば、これまでのようにあふれかえる観光客の受入れは回避すべきであろう。

確かに COVID-19 は観光客相手に商売をしてきた住民に対して打撃を与えたであろう。しかし、100年以上の歴史を有す小さな栈橋集落と住民の日常生活は、とりあえずは<abnormal>とでもみなすべきマスツーリズムの脅威から逃れることができ、<無秩序な観光空間>から以前の<normal>な

日常生活空間に回帰できていることは間違いない。

唐突かもしれないが、今後の周棧橋はいかにあるべきかを考えるならば、台湾原住民族のツォウ族の阿里山郷山美村における取組みが参考になろう。同村では、自然との共生観に根ざしたローカルナレッジにもとづく伝統文化をエコツーリズムと結びつけ、彼らの〈身体〉としての渓流域を自然生態園区として管理しつつ、経済的自立とコミュニティの整備、固有の生活文化の保全を目指して、コミュニティ・ベースのツーリズム (Community-Based-Tourism: CBT) を展開している。入園者は、自然生態区の入り口で入園料を支払うが、その収益金はコミュニティの生活環境の整備や村民の社会福祉、子供たちの教育のための資金として活用されている。園区内には歌舞ショーの舞台、食堂や土産物店が設営されており、それらからの収益金もコミュニティの事業予算の原資となっている (ティブスング 2010)。長期的な展望に立てば、このような CBT の実践は、周棧橋をコミュニティとして存続させるとともに、観光を通して活性化させる有効な方法と言えよう。

## V ジョージタウンは「脱観光的」/「節度ある観光」の場へと回帰すべきだ

以上をふまえ、ジョージタウンの観光地化の趨勢をあらためて俯瞰してみたい (図2)。

**[1]** 1980年代にペナンが島嶼リゾートとして観光開発されるなか、ジョージタウン旧市街地のショップハウス街は老朽化し、荒廃の一途をたどった (こうした現状を憂えて、PHT が1986年に創設され、歴史的建造物の保全・修景、そこに暮らす人々の生活文化を〈living heritages〉として存続させる活動を進めてきた)。街区の一部はバックパッカー・エンクレープとなっていたが、観光地化は顕在化していなかった。



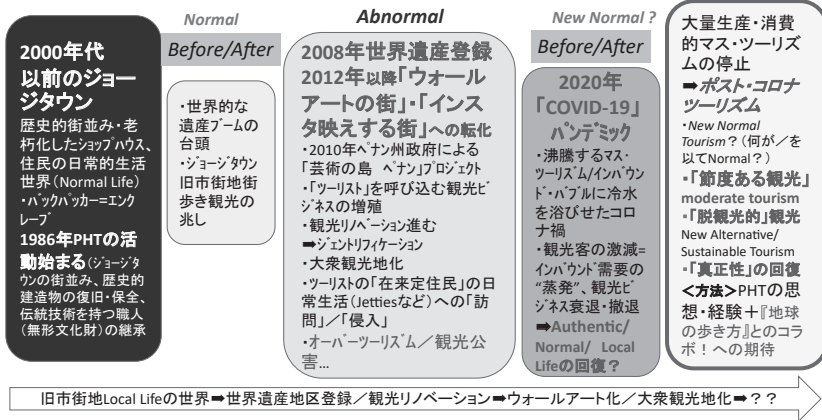


図2 ジョージタウンのランドスケープ/ツーリズム・スケープの変遷

【2】2000年、ジョージタウン旧市街地に対する「家賃統制令」の解除以降、世界的に遺産観光ブームが興隆するなかで、観光資本や観光事業者によるショップハウス街のリノベーションと観光地化が始動するようになった。そして、旧英領植民地都市が生成した建造物や街並み、文化が醸し出す〈ノスタルジー〉を求めて「街歩き」を愉しむ観光客が次第に増加するようになった。

【3】2008年7月のUNESCO世界遺産登録後、ペナンは単なる島嶼リゾート地ではなく、遺産地区ジョージタウンを擁する島として観光価値が付加されるようになった。さらに2012年以降、ジョージタウンは「ノスタルジー」を醸し出す街としてだけでなく、〈ウォールアートの街〉・〈フォトジェニックな/インスタ映えする街〉として、マスツーリズムの目的地となった。この段階において、旧英領海峡植民地時代に形成されたローカルの人々の日常生活空間は観光ビジネスによるリノベーションやジェントリフィケーションの波に脅かされ、大衆観光地としての風景(ツーリズムスケープ)が前景化(大衆観光地化=mass-tourismfication)したと言えよう。そして、年を追って過熱する大衆観光地化は〈オーバーツーリズム〉、いかえれば〈マ



スツーリズム感染症>が蔓延するようになった。

【4】しかし、2020年「春節」後に勃発した新型コロナウイルス「COVID-19」のパンデミックは熱狂・沸騰するマスツーリズムに冷水を浴びせることとなり、ジョージタウン観光は新たな局面に直面することとなった。

こうした状況を受けて、立命館大学文学部と人文科学研究所との共催により、2020年に2回、マレーシアに関わるシンポジウムが開催された。まず、7月24日のクレメント＝リアン氏を基調講演者とするZoom形式でのシンポジウム“Malaysia on Tour with/after COVID-19”において、筆者はコメンテーターとして、「持続可能な観光」、「観光倫理」、「観光の責任ある観光」など、これまで観光研究で説かれてきた考え方に加えて、世界遺産地区ジョージタウンは<節度ある観光> (moderate tourism) の舞台となるべきである、と述べさせてもらった。すなわち、これまで観光資本・ビジネスのみならず、マレーシア政府およびベナン州政府観光局は世界遺産観光への誘いにとどまらず、<ウォールアートの街>・<フォトジェニックな／インスタ映えする街>といったフレーズをキャッチコピーとして、ジョージタウン観光を先導（扇動）してきた感がある。これが、短期間に世界遺産地区をジェントリフィケーションの渦に巻き込み、<無秩序な観光空間>の生成をともなう大衆観光地化、ひいては<オーバーツーリズム>といった問題を引き起こしたのではないか。そうした状況を「仕切り直す」（リセットする）ためにも、COVID-19禍は、近年の世界遺産地区をめぐる<abnormal>ともみなさざるを得ない観光地化を再考するきっかけになるのではないかと説いた次第である。

また、9月6日のZoomシンポジウム「マレーシア、観光、文化」において、筆者は本稿の主題と同じテーマで報告する機会を得た。そこでは、“with/after COVID-19”への対応策としてマレーシア政府によって打ち出された<New Normal Tourism>というコンセプトについて、ジョージタウンにかか

わって、はたして「何が normal」で、「何が new」なのか？ COVID-19 禍直前の大衆観光地化の状況は、はたして normal だったのか？むしろ abnormal ではなかったのか？といった問いかけをした。本稿は、そこでの報告と質疑応答をふまえたものである。そのうえで、ジョージタウン世界遺産地区は、「生きられた／生きられる」この街の＜真正性＞を喪失するほどに<sup>12)</sup>、過剰なまでに大衆観光地化される以前の＜local/ ordinary/ normal＞な状況へ、すなわち、地元民の生活を脅かしたり、景観を破壊したりするような過度な観光化を抑制するためには、新規の観光施設の建設や観光リノベーションを「管理・規制」するような方策がとられるべきではないか、と（曖昧ながら）提言した。その際、報告のなかで触れることができなかったが、井口（2015:2018）が唱える＜脱観光的＞観光<sup>13)</sup>、あるいは高坂（2020）による＜観光に消費されない＞観光という考え方が、＜節度ある観光＞という考え方の補助線になるのではないかと考えられる。また、コーディネーターの遠藤教授からは、“with/ after COVID-19”という状況に置かれているからこそ、あらためて地元民と観光客との＜ホスピタリティの交歓＞をとまなうような観光のあり方を、アクターたちの間で追求するような仕組みづくりが必要ではないか、とのコメントをいただいたが、全く、同感である。これまで指摘されてきた以上に、また、井口や高坂も説いているように、持続可能な観光（地）の発展や地域づくりを追求するならば、単に経済効果だけを期待するような観光政策や観光まちづくりではなく、観光の現場やその周辺地域の住民の日常生活や生活文化の存続、発展にも益するようなく節度ある観光の場＞になることが求められているのである。

以上をふまえるならば、1986年からジョージタウンの歴史的建造物や日常生活文化の価値に「光」を見出し、世界遺産登録のために尽力し、それらの存続・継承を図るとともに、住民の視点に立った旧市街地の活性化・遺産保存、持続可能な観光産業の促進ために取組んできたPHTの役割はこれまで以上に大きい、と言えよう。

さて、COVID-19の感染拡大がおさまりつつあると言われるペナンは、2020年5月、マレーシア政府によってランカウィ島とともに「グリーンステート」、すなわち安心・安全な観光地として認証されるようになった<sup>14)</sup>。また、「New Normal Tourism」コンセプトにもとづいて、と前置きしながらも、早々と「コロナ後に行きたい世界遺産 文明の十字路、ペナン島・ジョージタウン」と題する記事も発信されている<sup>15)</sup>。

他方、観光需要が大幅に減退したとはいえ、ペナンを対象とした投資ブームは必ずしも沈静化していないようである。日本人投資家向けのあるWebニュースでは、「[マレーシア]観光業界の回復にむけた動き／ニッチな物件が資産価値の大幅上昇をとげている」として、今だからこそ投資のチャンスである、とジョージタウンへの観光投資を指唆している<sup>16)</sup>。

これらの記事から、“with/ after COVID-19”下、ペナン・ジョージタウンが依然として観光目的地および投資先としての魅力を失っていないことがうかがわれる。むしろマレーシアのなかでいち早く安心・安全な「グリーンステート」であることが謳われていることから、今後、他の地域に比べて観光（投資）復興の動きは早まっていくことであろう。しかし、COVID-19禍以前と同様の（abnormalであった）観光政策・ビジネスのあり方は再考されるべきである。地元民の日常生活・生活文化、街区の景観を存続させながら、バランスのとれた＜持続可能な／節度ある観光＞が追求されるべきであろう。

[附記] 本稿は、2020年9月6日（日）、立命館大学文学部主催／立命館大学人文科学研究所／遠藤英樹代表科研共催のシンポジウム「マレーシア、観光、文化」（Zoom方式）における報告をもとに執筆したものである。同シンポジウムでの報告にかかわって、コメンテータでありペナン訪問の際にいつもお世話になってきたクレメント＝リアン氏（Penang Heritage Trust：評議員）、報告の機会を与えていただいた遠藤英樹氏（文学部教授・人文科学研究所所長）に心より御礼申し上げたい。

## &lt;注&gt;

- 1) マレーシア政府観光局 HP <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/heritage.html> (2014年9月15日閲覧)。
- 2) PHT は、1986年に市民有志によって設立された国際 NGO であり、ジョージタウンの歴史的建造物や街並みの保護・復旧・保全、伝統技術を持つ職人の技術等の無形文化財の継承・保全、ベナンの歴史遺産の意義を伝える一般市民への啓もう・普及活動等を通じて、世界遺産への登録の実現に貢献してきた。 <http://pht.org.my/>
- 3) 2020年7月24日、立命館大学文学部・人文科学研究所共催のシンポジウム "Malaysia on Tour with/after COVID-19" における基調講演者のクレメント＝リアン氏の報告による。
- 4) リチャード・W・バトラー (Richard.W.Butler) が 1980年に提案した、観光客数と時間の関係性で表現した観光地のライフサイクルに関するモデル。観光地の成長を、1. 探検段階 (exploration)、2. 参加段階 (involvement)、3. 発展段階 (development)、4. 完成段階 (consolidation)、5. 停滞段階 (stagnation)、6. 衰退段階 (decline) または再生 (rejuvenation) の6段階を示している。中崎茂 (1998) ほか。
- 5) KOMTAR は筆者が初めてベナンを訪れた 1985年に竣工間近だった州政府機関のオフィスと商業スペースから成る複合タワービルであり、ベナンのランドマークと称されてきた。建設当時から旧ショップハウス約 300戸の撤去をめぐって、住民から反発の声が上がっていたばかりか、市街地活性化の拠点となるとの目論見はずれ活力を失っていた。
- 6) マレーシア政府観光局 HP <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/pdf/street-art-2014.pdf> 2014年12月13日 (2015年8月10日閲覧)。
- 7) <https://www.go-malaysia.info/travel/tr-penang/penang-street-art-01/> 2019年10月29日 (2019年12月1日閲覧)
- 8) それは、『The Clan Jetties of Penang / 檳城 姓氏橋』という油彩の絵葉書であり、周氏・陳氏・李氏・楊氏・郭氏・姓氏混合の6つの棧橋集落の「今」が描かれている。「今」といっても、周囲の発展に取り残され、懐古・郷愁の眼差しが向けられる「過去のごびた、生きられた集落」という感傷を呼び起す「今」である、といってよい。後にこれらの棧橋集落は、世界遺産地区ジョージタウンを構成する歴史的建造物および生きられる遺産に含まれることとなったのである。
- 9) 例えば、<https://www.travel.co.jp> 2018年8月14日 (2018年8月20日閲覧)
- 10) 2000年以降、海外旅行が解禁となった中国からの膨大な観光客の訪問と彼らの現地社会の常識やルールを逸脱したふるまいは、世界各地の観光空間を変質させ混乱を引き起こすなど、世界中で大きな社会問題となった。“disorganized tourism space”とは、こうした中国人観光客の観光行動について、<ホスト－ゲスト関係>論の視点から論究するにあたって Chan Yuk Wah (2009) が提起した概念であるが、中国人に限らず、近

年の国際的なマストツーリズムの現場でのツーリストのふるまいを考察するうえで有用な概念と言えよう。

- 11) 2020年9月6日の立命館大学文学部・人文科学研究所共催によるシンポジウム「マレーシア、観光、文化」での筆者の報告に対する質疑応答のなかで、コメンテーターのクレメント＝リアン氏から得られた情報。
- 12) ジョージタウンと位相を異にするが、ジェントリフィケーションが進行するなか、住民が長年暮してきたニューヨークの再開発地区のあり方について、＜真正性＞が失われていく過程を批判的にとらえたシャロン・ブーキンの著書が思い起こされる（シャロン・ブーキン 2013）。
- 13) 井口貢（地域文化政策・地域観光文化論）は、観光商品の大量生産・大量消費（・大量廃棄）型のマストツーリズムを、観光公害、オーバーツーリズムを必然的にもたらすとして批判し、「地域の所与性・常在性を重視した文化資源の活用を通して、…地域の固有価値が尊重され、文化と経済の調和ある発展が具現化されなければならない。」（2015：18）と説き、観光対象となりうる文化資源は常にいかなる場所にも存在しており、それを見出すことの努力の必要性と、その結果もたらされる観光振興の在り方を、＜常在観光＞という概念を以て説く（2015：7）。そのうえで、井口は観光ビジネスに扇動されてきたマストツーリズムの在り方を批判し、＜反・観光＞＜脱観光＞的観光の意義を提唱し、＜生きている地域文化遺産＞への「まなごし」を育むことを前提とした地域観光の重要性を述べている。こうした一連の主張には、地域の内発的発展論と結びついた「オルタナティブ／サステナブルツーリズム」論が背景となっていることはあらためて述べるまでもない。井口が唱える＜脱／反観光論＞は、筆者が提起する＜節度ある観光＞という考え方と重なり合うと思われる。さらに言えば、1986年以降、PHTによるジョージタウンでの取組みは、井口の＜反／脱観光＞的観光論を先取りしたプロジェクトであった、とあらためて評価すべきであろう。
- 14) ①「観光地からのメッセージ：マレーシア政府観光局」 <https://travel.watch.impress.co.jp/docs/special/1250438.html> 2020年5月5日（2020年7月24日閲覧）、②「マレーシア政府観光局、コロナ後の新基準旅行スタイルを提案。ランカウイ、ベナンリゾートに注目」 <https://travel.watch.impress.co.jp/docs/news/1259816.html> 2020年6月18日（2020年7月24日閲覧）
- 15) 「コロナ後に行きたい世界遺産 文明の十字路、ベナン島・ジョージタウン」 <https://antenna.jp/articles/10644796> 2020年5月20日（2020年7月24日閲覧）
- 16) 「[マレーシア] 観光業界の回復にむけた動き ニッチな物件が資産価値の大幅上昇をとげている」 <https://propertyaccess.jp/articles/hope-for-tourism-recovery> Jul 17, 2020年7月17日（2020年8月6日閲覧）「ベナンの歴史建造物市場は過熱気味です。… シンガポール人投資家は「ショッピングハウスを列ごと買いあさり」、賃貸料を少なくとも500%跳ね上げたといえます。平均して、これらのショッピングハウスは、

2010年以前の1,300リンギット(約3.6万円)の5倍以上となる7,000リンギット(約19.4万円)～10,000リンギット(約27.8万円)という法外なコストを要求しています。』

### <引用・参考文献>

- イカロスMOOK(2014)『マレーシア ペナン——古くて新しいエキゾチックタウンを歩く』イカロス出版。
- 井口 貢 編(2015)『観光学事始め——「脱観光的」観光のススメ』法律文化社。
- 井口 貢(2018)『反・観光学——柳田國男から、「しごころ」を養う文化政策へ』ナカニシヤ出版。
- イワサキチエ・丹保美紀(2009)『マラッカ ペナン 世界遺産の街を歩く——大航海時代へのノスタルジアに誘われて(地球の歩き方 GEM STONE 040)』ダイヤモンド社。
- シャロン・ズーキン(内田奈芳美・真野洋介訳)(2013)『都市はなぜ魂を失ったか——ジェイコブズ後のニューヨーク論』講談社。
- 高坂晶子(2020)『オーバーツーリズム——観光に消費されないまちのつくり方』学芸出版社。
- ティブスング・エ・バヤヤナ(汪明輝)(藤巻正己訳)(2010)「エコツーリズムによる自立——台湾阿里山里達那伊谷溪での経験」(江口信清・藤巻正己編著(2010)『貧困の超克とツーリズム』明石書店)147-211。
- 中崎茂(1998)「観光地域の発展と衰退——バトラーのライフ・サイクルモデルの紹介」『社会学部論叢』(流通科学大学)8(2),97-111。
- 鍋倉咲希(2018)「観光によるアート概念の再編成——マレーシア・ジョージタウンのストリートアート観光を事例に」『観光学評論』6(1),19-34。
- 藤巻正己(2014)「マレーシアにおける遺産観光と活用される植民地経験——再資源化されるコロニアリティ、ハイブリディティ」(天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし——再魔術化される観光』天理大学出版部)37-58。
- 藤巻正己(2016)「世界遺産都市ジョージタウンの変容するツーリズムスケープ——歴史遺産地区の観光化をめぐるせめぎあい」『立命館文学』645,137-163。
- 別冊宝島(1989) <1981>『別冊宝島②復刻版 アジア・太平洋(発想する旅のガイドブック)』JICC(ジック)出版局。
- Butler R.W.(1980) 'The concept of tourism area cycle of evolution; Implications for management of resources', *Canadian Geographer* 24-1, 5-12.
- Chan Yuk Wah(2009) 'Disorganized tourism space: Chinese tourists in an age of Asian tourism', in Tim Winter, Peggy Teo and T.C. Chang eds., *Asia on tour: Exploring the rise of Asian tourism*, 2009, London: Routledge, 67-77.
- Chin Kon Yit(画)・Chen Voon Fee(文)(2001), *Penang, sketchbook*, Singapore: Archipelago

Press.

Clement Liang C. M. (2017) 'George Town's street mural art and tourism impact', *Asian Journal of Tourism Research*, 2 (3), 168-188.

George Town World Heritage Inc. (発行年不詳) 『ジョージタウンの姓棧橋』.

## 【附記】

### (1)

本稿は、立命館大学「With コロナ社会 提案公募研究プログラム——Visionaries for the New Normal」 「COVID-19 以後のツーリズム・モビリティの課題と可能性」(研究代表者：遠藤英樹) の助成による研究成果の一部である。

### (2)

本稿は、JSPS 科研費 20K12442 「グローバルなアジア世界の共生を志向するポリフォニック・ツーリズム (多声的観光)」(研究代表者：遠藤英樹) による研究成果の一部である。

